

プロメテウス (承前)

長尾久敬

三

圖式化に於て個はプロメテウスを類はゼウスを、種はティタン族と人間種族を意味することを把握し、比喻に於てゼウスに、プロメテウスに、人類に蔽はせて來た夫々の特殊性から純化するとき再び、普遍の下に類・個、種なる關係に還元さるるを見る、原型はここより必然性を以つて築れねばならぬ。表象の單なる接續、偶然的寄り合ひを相互に關係し合ふ必然性の形式、概念にまで齎らず。而もそれが推論式の一般的關係のみを希求せずして、プロメテウスの關係たらねばならない。即ち行爲に於けるかかる關係であり、従つて類個種は、オリュンポスのゼウス、ティタン族のプロメテウス、カオス以來の種的なるもの一つとしての人間種族として象徴されねばならぬ。

人間が生活の苦悶——當座の表現として用ゆ、全體が苦惱の原構造を取扱ふことになる故に——を、自己に於て意識するとき、これと全く同時にゼウスとプロメテウスがあらはれて居る。人類が種的人間、ゼウスは類、プロメテウスが個的人間として先づ三分立せるとき、種的人間の苦惱は問を發し、個的人間はそれに答へ、類はその問答を保證し

つ又自ら規定せられるのである。その問答は單なる知的對話ではなくして問責、答責の全人的關係とまでなるが故にその原型は独自の記述を要する。「神話」と劇詩とがそれに近づく。「神話」は人の間に對する神の答であり、劇詩はその對話の關係を敘述し得るものとすれば、更にこの兩者を媒介として答へられた人間の側に於ける原型の構成が要求せらるるのである。さて人間は苦悶を意識するとき、無苦悶がこれに裏付けられて出る。而して先づ苦悶以前に、その全くなかつた無苦悶の時期を考へる故に、現時の状態、即ち三分立の融一或は統一を遡源に依つて求めんとする。しかしその限界に行きわたることに依つて無苦悶を前進にて獲んとする。或はその苦悶の現場にて解決せんとする。人間がその苦悶を苦悶として意識せる時既に、彼等の範圍内の物質的手段に依る生活上の全き解決に絶望した状態にあり、實にそこより出發して居る故に、苦悶の救済を直に宗教と理性とに求め出でて行くのは當然なことである。故に答へられるものとして、否、何かに責任を與へ得るものとして、絶望されし物質的生活技術が、問として取り上げられる。而も問ふことに依つて、自らその一面性を直に感じ、その缺くべからざる恩恵なるを同時に認めざるを得ない。

かくして生活の地盤にして而も呪の根元であるところのものの原因が問はれる。而して實に、これが種の苦悶に依る問なるが故に、統一と分離との對立が現象せる故の問なる故に、更に換言すれば、種の内部的鬭争對立に依る苦悶を解決せんとする、即ち統一化と個別化との對立を統一せんとする際の問なる故に、統一、類の側へではなく、分離、個の側へ問責は發せられる。個は類との關係に於て答へるべく求められる。故にプロメテウスが答へなければならぬ。かくてプロメテウスは答へる。彼は神話の原作者である。

かの類、個、種の三分立についての彼の答は、プロメテウスが人間を土と水とその他のものを雜ぜたものより神々に似せて塑造したといふことである。これは、人間を彼と神々とに現前させ、神々と彼とを人間に現前させたのは彼プロメテウスであるといふことに外ならぬ。かくて人間と神々は先づ分立する。人間の慘めさはそれが土と水、その他でこね上げられたものとして根據付けられる。しかしかう固定化されようとする際、人間の他の自然生物より優れし所以が求められ、神々に似せたる故とされる。しかし未だ三分立とはならぬ。ここに、プロメテウスの人間創造はゼウスの命に據つたとされる。ゼウスが手づから創造せず、プロメテウスに命じて作らしめた。ゼウスの創造に依るとき、土と水などで作られてかくも慘めなことはあり得ず、従つて苦悶もあり得ないであらう。しかし苦悶は現にあるのである。かかる關係は如何にして生じたのか。何故に、プロメテウスとゼウスは人間に對して他者でありつつ而も、分立してをるのか。兩者は人間に對して神々であり、それ自體に於て、テイタン族として人間種族に對するものである。このテイタン族より兩者は如何にして分立するやうになつたか。テイタン族の對立鬭争、テイタノマキアが述べられねばならぬ。

かの統一と分離との對立は、その原理的姿、精神と自然との對立鬭争に於てあらはれる。共に兩者を含みつつも、より精神の側なるゼウスと、より自然の側なるその父クロノスとの間の分離對立が激化し行き、そこにプロメテウスが個へと押し出される。先づ悟性的知に優れしものとしてあらはれる。故に自然の側にて、その知を用ひんとする。しかし自然の方へ分極し行くクロノス側からは、すげなく斥けらるるのみである。かくして精神の差し出す手を握つて、ゼウスの覇權を授けたのである。かくてテイタン族はタルタロスに投げ込まれ、閉ぢこめられて、類、オリュン

ポスの神々が統一する。しかしテイタンであるプロメテウスは、はつきりした個となる。新しき神々の如くに、主權者ゼウスには對せず、又遇せられない。而もその類の統一に共力してゐる間は、個は種を否定し、類を成立せしめたのである。而もそこに於て個は個となつたのである。しかし今やオリュンポスの神々と個プロメテウスとが疎遠になるとき、その相互否定の地盤として新しき種が見出されねばならぬ。統一せる類の最後の仕事は、ゼウスがプロメテウスの援助を謝して命じて人間を創造させたことである。かくて又種の中にてかの三分立が成立したのであつた。その統一を求めて原因に遡源しつゝあつたのである。而らば、このテイタノマキア以前こそ、その希望する統一が存したときではなかつたか。クロノス治下の黄金時代はそれではないか。併しゼウスの覇權を握らざりし時代は却つて闇黒時代ではないか。何となれば如何にしてこの統一の原理、精神なくして、その確立なくして、統一が可能とされようか。さればクロノスの支配に依る統一は、そのレアの産む子を次々に呑み込むことであつた。かかる直接的統一は、當然レアの奸策を將來し、統一を精神にまで明かとし、一方、種化の働きで類を倒さるべき容體にまでする。換言すればゼウスを助けしレアはクロノスに於ける自然の自己統一より、その統一そのもの即ち精神的なるものの分離を助長したものに外ならず、それに依つて自然力は、テイタンにまで沈澱させられる。この運動より、個のプロメテウスは媒介者として生じ、レアの意の方向を受繼ぐ。故に尙未だ種性を有するプロメテウス——ゼウス覇權後、その時、世にありし種族を全滅し、彼の手で新しき種族を造り、その統一を完成せんとするとき、阻止したのはプロメテウスであつたといふことは、人間種族のテイタン族への關係を明かにし、その種たる性格を判明にするものであらう。

兎も角も統一と見なし得べき状態は二つあつた。即ちクロノスの直接的統一と、ゼウスの覇權後ゼウスの手にて新

なる種族が作られるとき。若しかかる統一が可能であり、人間苦悶の解決はここにのみありとすると、レアとプロメテウスは呪はるべきものであり、自己の滅却のみがそれに到達し得るものとなる。苦悶は生より發し、苦悶の解決は死にあつて、而もその苦悶の解決を求めめるものは、その生に外ならぬ。かかる解決こそ、亦、ゼウスの望む所であり、クロノスの意欲である。人間としては彼等に死に依て絶對的歸依する外はない。これで一應解決がついたではないか。何が尙、遡源しようとするのか。プロメテウスの傲慢であるか、否尙亦、人間の問でありプロメテウスはそれに答へるものに外ならぬ。前と異るところは、かの問責と答責とを超えた立場にある故に、プロメテウス自身はあらはれないのである。いはば最後の統一、最始の原因を求むる形而上學的なるものへの變化である。

クロノスの支配下の統一にあつて、これを分離せしめる働をなしたレアは、クロノスと如何なる統一にあるのか。兩者は共に、いはば一次的テイタンである。これに對してはプロメテウス・ゼウスは一次的テイタンの子、いはば二次的テイタン族である。一次的テイタン族は種であり、特殊的自然としての種である。かかる精神的なるもの、従つて個の未發生なる種にあつては、統一及び分離は、有機的自然の對立せる二根元力、集約と展張として見られる。或ひは求心と遠心との運動に於て見られる。而して男性と女性とで現はされる。これは特殊的自然的種の全體としての運動であり、それを統一する外包だけが精神的なるものへ移行すべき姿をもつのである。而してこの特殊的自然的種を疎外せるものは、類たるウラノスを生めるガイアである。ガイアがウラノスと婚して生みしものが第一次テイタン族であり、キヌクロプス達である。かの類となりし男性ウラノスを女性の奸策で、移行せしめんとする。ガイアはクロノスと共にウラノスを打ち倒さんとする。かの類の強化はキヌクロプス、ケンチマネの種を否定し盡さんとするこ

とに依つて、打ち倒さるべき客體にまで違さうとするときへの、種の女性的なるものの復讐であり、尙ティタン族の存立に依り、ウラノスは化生してアフロディテ・エウメニデス等に、種に墮せるものとなる。かのクロノスの統一をうち破つたゼウスは、その統一の本來、外にあるキヌクロプス等の力を借りなければならなかつたこと、それがここに求められることが明かとなる。かくてガイア、ウラノスとポントスと亘山を産まぬ本來のガイアは、種の基體とも見らるべきものとなる。それは尙クロノスの統一からもうかがはれるやうに、しかしこの度はその根底に、その統一を成り立て居るものが考へられねばならぬ。それはかの暗き、タルタロス、純粹の否定的なるものである。それに對し、種の基體を内部より結合し成立せしめるものはエロスである。かくて苦悶に對し無苦悶を考へねばならなかつた人間、而もそれを必然的に問と答とで探求して來た者にとつて、肯定的なるものと否定的なるものとの原始型が現前し來つた。而も統一を求むるそれはエレボスとニユクスに依つて肯定者と否定者とを各々に於て否定し、絶對の一要をつかまんとする。

始めにカオスが成つた。これは原哲學者が措定したのである。彼はそれをつかみ、到底如何なる仕方でも、それをつかみ得ぬ人間に口渡しせんとするとき、かく云はねばならなかつたのである。人間にとつてこれは必然である。而もそれまで遡源して行つた共同の思索は、今やその必然性を以つて、現實として人間に迫つてくる。

始めにカオス成つて、ガイア・エロス・タルタロス成り、ガイア、ウラノスを産み、共にティタン族を産み、クロノスの支配を成らしむ。クロノス、レアと共にゼウスを産み、レア、ゼウスを助けてクロノスの王座を顛らしむ。ここにゼウスの時代開き、プロメテウス、人間を創造し、この現實に於てゼウス・プロメテウス・人類は三分立す。即

ち、神統記は必然的なるものとして人間に傳渡される。かくして人間は統一を遡源に求め、唯必然を得て、それが必然的に自分に來る運命として認めざるを得ない。ここに理智的諦念が生じこの現實を受納する。而して、一方かの生の自己滅却に依る類への歸依は、この必然性の裏打ちに依つて、更に強く求められる。

この必然の受納に解決を求めんとするものは、それだけでは、ともすれば安易なる現實謳歌者と化し、又反面その底に存する必然への無力感は、徒にこの分裂を持ち來らす側として見らるる、かの女性的なるもの、及び生活技術の恩惠者への非難となる。この受納の中に於ける能動性、自由が確保されねばならぬ所以である。又一方、かの絶對的歸依も、その統一を求めんとする能動性が亦存しなければならず、そこにも限定はされて居るが自由が生じてゐる。而して類への絶對的歸依は、類を普遍に高むることであり、若し個を之に媒介せざれば、類は種に墮し、個の發生しかけし自由は恣意に化す。

人類への火の齋らしは盜火として行はれ、類に依つて罪と判せられ、罰としてパンドラが人間に送られる。而もプロメテウスは益、類を輕視し得るものとなる。ここに却つて苦悶への三分立は激化する。これをも必然として受取り、苦悶への三分立は、統一への三分立とみなすことに依つて、遡源の解決の際尙萌芽としても確保しなければならなかつた自由が、ここにその本來の働きを起し、前進の方向を取る。即ち實際に遡源に依る解決をなさんとするとき、それはやがて、前進に依る解決とならねばならない。ただ前者に留るといふは、靦照的解決に過ぎず、實際に於ける解決とはなつて居らぬのである。眞の解決は自由に依る前進の方向にあるべきである。ここでその方向にての統一を問ふのは、又してもプロメテウスに對してである。何となれば、彼は先知であるから。その答はこの度は、豫言

的なるものとして、教の風貌を帯びてくることであらう。

それは先づ遡源に依つて得られし必然性を前進の方向へ適用することであり、知的把握されし必然に依る未來への洞察である。ゼウスがテチスをして産ましめる子はゼウスをその王座より突き落すであらう。種に於ける進展を通じてなされる類の變遷の洞察である。これは必然的であらねばならない。だが人間の求めてゐるのは、統一である。この類の變遷は必要なる條件であらうとも、類は何とあれ、種に於ける類と個との統一こそ、目指すものである。類の變遷は、それに規定せられることを要するのである。故に、ゼウスが、その王座より落されなくても、彼の變化に依つてかかる統一が實現されるならば同じである。種類個の理想的統一が設定されることを求められてゐる。人間の女イオの苦悶に答へる如くプロメテウスは、先づ個の解放を述べ得る。しかしそれは彼の側からの見通しであり、その統一の全貌をあらはすものでない。彼のその解放に於ける全歴史を、いはば振り返つた立場で述べて始めて、その全貌が明かとなる。これは既に和解後、人間種族に祭られてゐるプロメテウスの神託ともいふべきもので、それは人間の側の信仰に應ずるものである。それは必然の洞察に依るものと異つた姿を示す。前の必然の洞察は種々なる必然的可能の全體をいはば束にした見方であるとすれば、これは多くの必然的可能より現實として各瞬間その一つだけを探りつつ最後に到るその究極たらねばならぬ。

それに依れば、ヘラクレスがプロメテウスを解放する。ヘラクレスは神と人間との子、英雄である。類と種とを主體的に統一する行爲者である。存在的個に止るプロメテウスを主體的行爲に依つて救ふのである。かの、類と個とが種に轉落してゐる絶縁状態、カウカサスの繫縛はヘラクレスなる新しき種の行爲する個に依らざれば、解決或は和解

が出来ぬ。かくてゼウスに遣はされプロメテウスの肝臓をつひばむかの鷲が打落されるとき、ヘラクレスを媒介として、プロメテウスは己れの解放はゼウスの命であることを知り、全く同時に、交換的ではなく、ゼウスはその必然の祕密を知る。これは相互の自己否定に依つて却つて自己を肯定し得た真相でなくてはならぬ。今やゼウスは個を媒介せる類となり、高き神位に座す。その否定されし、いはば低き類は、エウルヌステウス王であり、種に墮し去つた嫉妬深くも又暴力的なるこの類は、ヘラクレスの自由の抵抗として、常にその力を現實化せしめる契機となる。かくてヘラクレスはゼウスに代るものでなく、又、容體化さることなく常に種を類に媒介する行爲者であり、死してオリュンポスの神と生くるものである。

人間にこのやうな統一の理想があらはれる。しかし必然性の知的洞察は、その統一は常に分離を含み、類は尙變遷して行くものではないかと吟味する。この統一を、かかる吟味に依つて、かかる吟味を通して、確立せしめねば、實際に不安が去らぬ。従つて完全なる統一と云はれぬ。全く類の變遷は、それが種を個の媒介に依つて成立してゐるものである限り、必然的である。知的觀照の立場からは、亦しても諦念の外はない。而も不安は底を流れてゐるであらう。再びここで解決に持ち出されなくてはならぬものは自由である。而も理想の立場に於ける自由なる故にそれは徳である。この變遷すべきものとさるる統一を、永久に確保せんとするものはヘラクレスの徳、殊に忠誠と剛毅とである。英雄の徳たると共に天才の仕事である。而もこの必然に變遷する類への固着は、類の轉落を當然、將來せねばならぬ。天才の場合にあつては、様式より流儀への轉落である。しかし天才の様式は他より跡付けられて、始めて明かとなるが、即ちいはば、無を踏んでゆくが、人倫的世界にあつては、その無が一たることを顯示さるるを求めて止ま

ぬ。それは慣習と同一視さるべきものでなく、人倫の核心の實在である。變轉する類の中の不動の核である。それは道徳的主體とも云はれよう。しかしそれはヘラクレスである。ヘラクレスが確保せんとするゼウスではない。それが類に於てみられねばならぬのである。ゼウスを變轉する類より守らねばならぬ。ここに低き類、種に墮すとまでいはざるも種と交渉する類を、個的類、類的個より區別しなければならぬ。個々の低き類をヘラクレスは變轉させる、併し、低き類全體はエウリヌステウス王に對する如く、そのままにしてをく。必然にそれは變遷するであらう。行爲者ヘラクレスは高くゼウスを確立する。而も彼も亦オリュンポスへ登るのである。

かくてゼウスはすべての王の王、萬人の父であり、その下に流動する類を許し、それを監視し、個への正義と、必然への洞察に依つて、それを調節、變遷せしめる。かかる力を實在に有しなくてはならぬ故に、無に止らずして實在の一でなければならぬ。この神を人倫的世界に實在せしめるとき、強ひて云へば、無に住する聖主ともいへよう。ここに人倫的世界の統一は成就する。個はヘラクレスを理想とすべきでめる。ゼウスに忠誠にして尊崇の念を懐き、プロメテウスに仁愛と同情の念を有する剛毅なる行爲者たるべきである。しかし遂にプロメテウスはヘラクレスではない。ヘラクレスの行爲中に計らずも苦しむに到つたケンタウロスのカイロンの永劫の生の苦悶を、その解放の際、直に我身に引受けることをヘラクレスに承諾したのはプロメテウスに外ならぬのである。個はその種性を否定することに依つて類の中に救はれる。而も主體的個にあらざる個はプロメテウスとして、統一の中に和解しつつも、尙苦悶を引受ける。

既に人間種族は、それぞれの度に於て個別化してゐる。ここに立てられた理想は、一般的妥當性をもつ必然性に依

つて、裏付けられし人倫的世界の統一である。而も今や、そこに於ては自己を種としての人間としてではなく、個としての人間として、見つめねばならぬのである。故に、かの理想に於て、求むる統一が實現しても、個としての人間に苦悶があくまで残るのは、かの個の原型、プロメテウスの示く如くである。かくて兩者は問答と云はんよりも共感に依つて現在に於て、これを解決せんとする。

遡源に依つて得たものは、必然の根據であり、前進に依つて得たものは自由の理想であつた。今や現在に於てこの二つを、はつきりした姿に於てみつむる。カオスと理想統一、その核としてのガイアとゼウス、それを絶対否定に肯定する、タルタロスとプロメテウス、類の統一を成立せしめるエロスとヘラクレス。而してそれらをカオスと理想統一に到達せしめるための契機としてのエレボス・ニユクスとエウルユステウス・カイロン。一方は無限に接し、他方は有限に接せんとする、一方の特徴は愛に於てみられ、一方の特徴は行爲に於て見られる。

必然を必然として受納したのは自由であり、自由の理想を立てたのは、必然あるためであつた。唯必然のみならばゼウスはテチスの子に仆されたであらう。行爲するヘラクレスに依る和解は自由を前提とする。種的なものは遂に必然的であらう。それを自由をもつて類に媒介し、統一さすものは個でなければならぬ。

人間の行爲はすべてこの必然と自由との綜合をめざす。その成果、彼の仕事は常に理想統一との關聯に於て見られる。ここに善と惡、美と醜が現はれる。自由なる行爲が必然に裏付けられし度に於て、眞と偽が現はれる。天才は理想統一への必然の道にある者で、その自由なる制作は、常にその必然に裏付けられ、作品に於て常に天惠的なものを見出す。理想統一への必然の道とは、多くの必然的可能、可能的必然の多岐なる道の一つを、究極より一線に引

き、採つたものである。天才は無意識にこの道を踏む。それは故に遊戯の風貌を帯びる。藝術に於て、それは無限に認められようも、人倫世界の嚴肅は、措定されしその世界の法則の威壓と相俟つて、常に行為の責任を追求してやまぬ。制作者の原型は、人間を形成せしもの、プロメテウスに外ならない。従つて、それは、天才藝術家の原型であり、人間のみならず、神々の姿を人間に現前せしめる姿にしたのも彼に外ならぬと云へよう。その制作の三昧に、或はその作品の上に完全なる統一が存しようと、遂に彼は個として自己を意識せざるを得ない。人間性の原型としてプロメテウスがあらはれて來なければならぬのである。

プロメテウスは神と等しき種より出でてゐる。而して神の高揚に、常にその顯示に缺くべからざる神といはばコムニカチオンをなす對神者である。しかし絶對に神の手段ではない。却つて神も亦、プロメテウスを深化し常にその展開に缺くべからざるものといへる。ゼウス對プロメテウスである。プロメテウス對ゼウスである。而してその顯示、展開は人間種族、人類への前にであり、その中にある。

ゼウスとクロノスの死闘の際に、プロメテウスは撰擇の自由を有するかに見えた。自然力を助くることが出來たならば、彼自身その先慮に依りその主權を握り得たであらう。併し遂に精神の下に狡智となつたのは、運命的必然であつた。ここに悟性は、ゼウスの精神性への淨昇と相應して、その自己性へ徹底してゆく。この相互關聯をなさしめるものは、プロメテウスの側に於ける人間種族への愛、所謂テイタンの人類愛である。かくて人間創造に次いで、盜火或は齋火が敢行され、人間を悟性的存在に引き上ぐることに依つて、プロメテウス自らは理性に到り、従つてその意欲がはつきり姿をなしてあらはれる。ここにプロメテウスの繫縛と刑罰の可能が生じ、ゼウスはピア・クラトスをし

てプロメテウスをカウカサスの岩山に繋縛せしめ、日々その懲をして、その肝臓をついばしめる。プロメテウスには誇らしき反抗的自由と共に尙純化されぬ意欲の苦痛があり、誇りと苦しみの源、自己意識があらはれる。

苦惱は罪の罰であり、それを受取る忍苦は淨罪となる。而もこの忍苦は誇らしき強き意志に外ならぬ。ここに彼は解放さるる時に達したのである。ゼウスはその忍苦の中に必然の祕密を讀みとり、自らを淨昇させて、プロメテウスを解放する。それはより高くなりしゼウスの恩寵であり、プロメテウスの勝利である。ゼウスの進歩でありプロメテウスの努力の成果である。人間に、プロメテウスへの復讐として遣られし、總てを興へられたる女性パンドラは、後慮エピメテウスの媒介に依つて、總ゆる不幸と災害との源とみなされたが、僅にこのこつた希望カリスに頼つて人間種族は遂にその女より英雄ヘラクレスを生む。かくて人間が主體的行爲となることに依つてプロメテウスとゼウスとを和解せしめるに到る。

人間愛よりの文化的努力、遂に免れ得ない繋縛、而も最後に克ち得べき解放、これこそエレウシスの密儀に於ける不滅なるものでなければならぬ。神話は移り變るであらう。而も人間の、個の存する限り最後まで残るべきものは、個の原型にして、神話の原作者たるプロメテウス自身の神話である。プロメテウスとの共感先づ文化的實踐を要求される。

文化、人倫性の向上への努力、忍苦の意志勇氣、理想の實現、その凱歌、——併しその際常に神は淨昇してをる、それに對してこれらはやがてそのまま、罪であり、傲慢であり、苦惱であり罰であり、その救ひはただ恩寵あるのみである。この上に、この遂に逃れ得ぬ矛盾をそのまま絶対的同一と把み得ぬ個は、引き裂れんとする個は、これまで

に吟味し來つたかの統一方法をこの上で試み、夫々の解決をその場合に應じてなさうとする。即ち禁欲的諦念、理智的諦念、藝術の三昧、人倫的行爲に没入し、これをこの現在にて絶對にふるものとなす。併し尙、苦みを解放の後に引請けたのが、プロメテウスの運命的自由であつた。この最後の矛盾を引請けんとするものに外ならぬ。その不滅の苦悶を我が身に引請けるのである。

かく共感に依つて、かくまで高揚されし人間個、我々各自の魂は、この神話的理念原型的、無限的展開を凝視することに依つて共感の限界にぶつかる。即ち我らの生は有限であるといふ事實である。プロメテウスはその有限性を神話とする。しかし今や實存の有限である。靈魂不滅は結局プロメテウスの不滅を意味するに終るであらう。假令その論がこの問題を解いたとしても實際の力としてはよきまじなひたるに止まる。寧ろ却つて、我らは、全き死あることを生に於て悦ぶべきである。この死を生にて悦ぶものは近き死を認めるが故に、このプロメテウスの展開を、凝集し結晶させて實現することに努める。若しこれを放棄するなら、唯々死の恐れと生の惨めさあるのみで死を生にて悦ぶものと決して云はれないであらう。

神話は遂に類の事柄であり、個の行爲は類の否定的肯定である。客體となりし類の絶對否定である。かくて、我らはこの神話を成立させる核としての實踐そのものを以つて、この神話を突き抜けねばならぬ。それが密儀であり、儀式であると云はれるならば、かの人類への火の齋らしがその密儀の發端とならねばならぬし、或はプロメテウスの古代の儀式、かの聖火競争が實施されねばならぬ。技術と學問、文化と眞理とを齋らすことと、受繼ぎ傳へて斷やさぬこと、殊になによりその精神、人間愛と勇猛心とを。ここに於てこの神話は絶對的に肯定されるのである。

四

個の神話を啓かんと傲つて、その相對に於ける原型權を誇つて主張するが、象徴に裏付けられし自己を滅却し得ない。絶對がこの有限を動搖させる。この類と個との間隙は自由をもつて充すべきとするも、歴史にびつたりしたベコンの如き建設的に生々した朗らかさが出て來ない。「古代人の智慧、プロメテウス・或は人間の位地について」分裂、従つて批判に應ずるものが自己の内部にあらはれてゐる。先に比喩とし、この神話構成に媒介し來つたものの、行爲に於ける反駁が眞の對立としてあらはれ來るのである。その對立を克服しつつ主張し來るとき、それはその際に於ける突破であつて、決して對立するものが絶滅されたとはされない。寧ろ常により強力にあらはれ來るものでなければ、對立の名に價しないであらう。これを死まで強行することに依つて批判に耐え、對立を克服し來ることを證明しなければならぬ。又一般的象徴では、この主張でその行爲の裏打ちをするに止つた。しかし強行する信を唯、プロメテウス悲劇の倫理學化のみには求められぬ。我々はかの神話を、一般が個を規定する當爲としてのみかかげたものではない。このことは既にプロメテウスとヘラクレレスとの關係に於て、觸れて來た。その幼時の選擇に於て義務を選んだヘラクレレスは個としての自己自身を諦め、一般に於て個たる自己を表現する人倫の英雄であつた。しかしプロメテウスはその解放を一般に於ける安息、一般との和解にとらぬ、更に自らに引き受けし苦惱に於て、一般の目的論的統一を傲つて更により高き一般を先見し、かの縛られしときと同じく自ら安んじてゐるのではない。これではヘラ

クレスと同じである。一般に於て表現さるべき個である。然しプロメテウスは一般に對立する個として意義をもつ、一般の例外として孤獨の道を行くもの、それは義務としてではない。矛盾に於ける絶えざる緊張である。この緊張に於て人間は自己を意識せしめられる。プロメテウスは一般に對立し超えゆくものであるが遂に一般に終る。個の神話、有限はそれ自體無限として神的なるものへ反抗可能であらうと、無限はそのまま制限される、神の立場に於ける個の原理である。自由を自體とせるものの必然の形式、唯一度の行爲の原型、不死者に於ける人倫性の同一諸關係の一般的象徴である。この神話が一般として個を規定するとき、個はこの一般を打破るべしとなる。プロメテウスは神話にして神話を打破るものといふならば、又、プロメテウスは神話を打ち破る神話であると云はれ得る。眞に一般に對立し、一般を例外的に規定し得るものは唯、人間個のみである。自由にして唯一度の行爲をなすもの、死をもち従つて一般に反抗し、絶對に關係付けらるるもの、かの理念に於ては、不死なる故に神に對立し得たのであつたが、かくして人間個とプロメテウスとの差異は、大小、即ち巨人と人間といふ差ではなく、不死のものと死すべきもの、常に永遠に起りつつあるものと唯一度しか生きないものとの異である。

巨人と人間との差とするとき、模範とされ、一般が個を規定しようとする傾向をもつ。自ら一般のために犠牲になる悲劇的英雄と大苦行者とは人間を泣かせ、高揚し勵まし、慰安を與へる。彼等の核心は情熱である。その本質は一般に於て個を表現すること、一般の表現の道具たることである。情熱に於て巨人プロメテウス氣取りは滑稽である。それは無難なところでの道化芝居でない限り、イカルス・エウフォリオンの運命を倫理學としようと考えると同然である。英雄崇拜と一般へ自己を表現する個の諦めの本質によつて規定さるべきである。しかし憤せざれば一般が個を

規定するとは、退屈な熱のない空轉、個の盲目的な力なき屈從に外ならぬ。彼も人なり我も人なりとの發憤は笑ふべきでない。倫理學の核心であり、模範に對立する個であることである。ここに巨人と人間との差は消える。同じ思惟する個である。問題は、死すべきものと不死のものとなる。死すべき人間が、不死者プロメテウスたらんとする、これは笑ふべきか、泣くべきか、憤るべきか、諦めべきか。死すべき人間個に對する一般者と不死者の對する神的なるものと間には深淵がある。苦惱體驗と苦惱の構造との間の如き。より高き一般はプロメテウスにとつては、崇高なる英雄的忍苦の中に先見されようも、人間個にとつては無限のカオスと無知とを告白せしめるもの、前者にあつては、必然の先見であるが、人間にとつては自由の決斷であるもの、ここに同じ思惟する個ながら、智は必然に對して無力と告白するものと、思惟することに依つてのみあらゆるものより偉大なりと自覺するものとの異がある。不死の誇りと可死者のみじめさは直に死得ざる絶望と、死に得る強さとなる。ここに、その神話、一般的象徴、必然性、原型の故を以て、不死なる個が批判を受けねばならない。それは死する個の絶對との關係より、この一般を規定せんとするのである。

絶對者は全知全能であり、汝を殺し又生かし得るもの、プロメテウスに對する神的なるものの如く個を殺し得ぬものでないとき、徹底的被造感は、創造の神話の一部分をもプロメテウスに與へぬ(テルトウリアスは、創造神を彼こそ汝等の眞のプロメテウスなれば！とする)。之を粗雑な異教のごまかしとし(シヤフツベリー)、或は、あくまでも美しい詩的なるものに止るとなす(ゲーテ「詩と眞實」)ここに於ては個が絶對者に關係し無となることに依つて、一般者は絶對者にまで規定される。しかし死すべき個が無になるとはその有限性を捨てることであり生かされたものとして一般に自己を表現する。更に従つて、不死

として個が個として一般に對立する。ここに永遠に於ける不死の個の原型が依然變更され得ないのである。

しかしこれは再び構造上の論議である。無になるとか一般に對立し之を超越るとかは人間個にとつて全く破滅を意味する、プロメテウスは不死なる故、孤獨の中に、その苦惱によつて確信してゐる。人間個がその永遠の原型を分預するといふならば、死に得ぬ絶望の苦惱に陥る。而も誰が苦惱の構造の上に坐してないものがあり得ようか。プロメテウスは絶望せるもの、必然を先見してゐる。人間の闇い胸に希望を置き、その苦惱をゆるめてやらうとしたのは外ならぬプロメテウスである。故にプロメテウスは沈黙してゐる。人間の破滅を恐れる人類愛の故に。人間を一般へ安らはせつつ、自らはその沈黙故に苦惱を嘗める。詩人アイスキュロスはプロメテウスに有名なる沈黙をさせる。それは雄辯より更に劇効果をあげる。教師キケロはアイスキュロスのプロメテウスは餘りに苦惱を訴へ過ぎるといふ。縛られたプロメテウスは語るも苦痛、黙すも苦痛として、就れかはコーラスの求めに應じて語る。しかし舞臺の上でないプロメテウスは沈黙し、ゼウスの祕密を告げない。ゼウスは迫害してその告白を強へる。和解と解放は、それをあきらかにして、一般の中に表現することである。劇にては縛られしプロメテウスはそれを暗示せねばならない。語ることが出来るが沈黙してゐる。それはより高き一般を先見してゐる故である。絶望者にして人類愛のテイタン、不死なるものであり、遂に一般を越え得ぬもの、ただ個として一般の上に立つものの指示に止り、不死者として神的なものに對立する關係の一般的象徴であるもの、人間個の行爲と自由とに惡無限の喘ぎを以つてあこがるるものがある。

その誇りとする本質、先見を取り上げよう。プロメテウスは何を先見し得るか。總てを、しかしその總てはあくま

で一般に止らねばならぬ。一般を超えたるものは語り得ない。必然を先見するものの沈黙は語り得るものを秘して居るに止り、プロメテウスはより高き一般と雖一般を俟つ。一般を超えたるものはプロメテウスの領域を超える。しかば一般の先見とは何であるか。人類とバシレイアとについての先見である。而も人類が個を規定し、運命がバシレイアを轉移さすとする先見である。而も智慧も先見も必然に従はざるを得ないとの告白である。シエリングは、「プロメテウスとは次の如き原思想である。それに於て人類が神々の全世界をその内奥よりあらはして後、自己自身に還りつつ、自己とその固有の運命とを意識させられたのである。神々の信仰の不幸を感じたのである。」と云つてゐる。

そこには永遠の退屈なる空轉がある。民衆知の先見者シレノスが無理に強へられて限りなく哄ひつつ云ふことは、人間にとつて一番いいことはその手の届かぬこと即生れてこないこと、一番目は直に死んで了ふこと、これは笑ひにまぎらしてゐる。プロメテウスはかくは語らないであらう。彼が語るるときそれは必然の先見であり、人類勦滅の必至を以つてかの空轉に終結を打たんとすることに外ならない。テイタノマキア戦後、ゼウスは、人間種族を新しき種族に代へようとし、又その後、大洪水で以て全滅しようとした。いづれもプロメテウスの反對で僅かに勦滅を免れてゐる。希臘神話に終末觀が稀薄で、死觀、死後觀、冥府觀は一應取り扱はるるも、火神ロキの猛火勦滅の如きと云はぬまでも兎に角宇宙終局の遂行のないのはプロメテウスが希望を人類の暗い胸に植ゑたためである。バシレイア問題にせよ、その限りなき轉移は一般の個の規定の如く行はるとき内實なき空轉であり、最後まで沈黙を押し通させて終結を得んとすれば、シエリーの如く權力と支配との根本的否定の空靈に至らねばならない。しかしプロメテウスは生

きゆくことと一般のために人類を保護する。人類愛によつて人間によきことは死ぬことであるととして勦滅はしない。自殺も禁欲もとかない。その先見により却つてゼウスは倒れない。「この世よし」は一般が個を規定し行くための基礎感覚である。不死を希ふ人間個は健全である。苦惱の原型を老死に置き人間の努力の彼岸に置かうとするのは賢明である。更に一般が個を規定し行くための基礎は、その人倫的必然性によつてプロメテウスのなしたること即ち「可死者に彼より總ての技術—學が来る。」ことである。

かの空轉する先見もこれに基いてなされる。人類勦滅は、この薬と火と技術の創造者、カイロンの毒薬、メデアのもつ「プロメテウスの魔薬」、黙示録に記されし火と硫黄と苦艾、デウカリオンの二舞を演ぜぬやう装置を完備すること。主權の轉移には縛られしプロメテウスはそのときまでは出さぬが、雷電、電光よりも強力なる武器をもち出すことを匂はす。これらを沈黙してゐるとすれば、「未成年」の大祕密ロステヤイルドになることと同然である。ペーコンは次の寓話を引用してゐる。プロメテウスの火を盗んだことをゼウスに告訴して褒美に羨ばぬ青春不老不死を貰つた人間が、驢馬の背にあづけての歸途、驢馬が渴に耐りかね一杯の水で蛇とそれを交換し、人間の手から失つて了つた。時を滞らせ生命を延ばす方法と療薬とは正しい火の使用と強き技術への確信と經驗への不撓の努力によれば決して絶望でない、と。カイロンは自分で不死の薬を作つた。しかし亦カイロンは自分の毒薬でヘラクレスの矢に傷つき、自分の調合した療薬も役立たずプロメテウスが身代りとなるまで永劫の苦しみを脱し得ず、苦悶の中から死を願つた。自らの薬で不死となりしその身についた不死の取り去られんことを。不死にはゼウスがパンドラに持たせた小匣の中の苦惱を遂一、火と技術とで克服してゆくことが當然從屬してゐる。しかしこの小匣は從である。パンドラの

出現そのものが、悲劇と苦惱との起りである。凡て人間共の心に悦びつつ自らの破滅を抱かうもの、ゼウスの哄笑である。ここに一般者の母胎にして且つこれを轉移混亂に導かんとする女性の淫亂がある。錯動原因、事物の怒り、神の怒り、ここに行爲の原動がある。情熱なくしては、一般へ自己を犠牲にし表現することは出来ない。憤怒なき行爲は一般への力なき屈從、退屈にして欠呻を催さしめるもの、大口あけて深淵開けば、却つて、一人のみにしてピアに抗し神々の軍に敵對して立つ敵意に充ちたる大地生れの百の頭もつ猛烈なるテュポエウスはその深淵より立ちあがる。神に張合ふ暴。すべての形式を否定するもの、より高き一般を先見するプロメテウスの俟つもの、而も一般に頼るプロメテウスも吹き飛ばされようとする。これに超然たるは、それ自體無限として神的なるものに反抗し得る彼の崇高なる姿である。しかし無限としてあらはれるや直に有限とされし彼はこのカオスの中に死ぬ神々の一人である。必然の先見をなす彼は、苦惱を超越る勇氣に於て崇高であるが、一般を確かなる後楯とする故に、直に笑ひとテイタンの醜とに移り得る、更にその根元、カオスに還歸する。無知なる人間個はカオス現前して希望を喪失し、その有限性を粉碎されて絶對に直前させられる。かの一般に對立し、個が一般を規定すべきを教へしプロメテウス自らもカオスに消えたのである。彼は彼自身の行爲し能はざるところを教へようと喘いだのである。人間個にして始めて自由たり得る。自由を自體とせる必然の形式はプロメテウスである。人間個にして始めて行爲し得る。プロメテウスは行爲の原型である。死ぬべき人間個にとつて人倫性の諸關係は生きる。その同一諸關係の一般的象徴はプロメテウスである。その神話はカオスに終結する。而も神話はカオスを端始にもつ。それは人間個たる私にカオス現前してゐる故である。あらゆる形式、法則、の喪失、即ち一般を超えし獨自としてあるを見出すこと、ここに始めて絶對に直前させら

れる。

「^{もろば}諸刃なす電光を繞らして我に投げつけよ。轟く雷鳴、震撼さす旋風もて大氣をつんざけ。嵐もて大地を底より浪立たしめよ。逆巻く大洋の狂亂を星の道と糺り合せよ。我をゼウスの下せし抵抗し難き渦の中に吸ひこめ、暗きタルタロスへ石の如く投げ入れよ」。宗教の重心説、絶後の蘇りの形式を喪失する。蘇りはルシフェルの如く奈落の底、プロメテウスの如く巖もろとも雷電に打ちひんざかれタルタロスに横はる己を見出すか。この體驗を直に、イデーに仕へる冒險の歡呼、キエルケゴールの反復の範疇に翻譯するか。私のこのカオスに陥れるは、世界のカオスの現在の故であるとい安心することは決して出来ぬ。絶対に直面して一般を己れもて規定せんとすること、そこにカオスが現前する。把まんとして把み得ざるもの、この全一なるもの、この不定なるもの、この確かなるもの、この殺倒する混亂、この激情の渾沌、而して空無と頼無さ。黑暗澹、深淵、我渾淪地に吐在し了らまほしきもの。大丈夫、カオス現前せば、カオスを恐る勿れ、須く直にカオスの源底を究む可きである。この現前してゐるカオスをカオスと概念する、この立場で先づ究めねばならない。然るとき歴史もつ概念である故にその追求が貫徹さるべきであらう。シエリングはその藝術哲學に於てはカオスの根元直觀は絶対の直觀となしたが、神話の哲學に於ては次の如く述べてゐる。「カオスは思辨的概念である。このカオスの概念は神々を超えそれに敵意持つ哲學のそれである。アリストブアネスに於て既にこれは、神々に反對して向けられし、民族信仰を超えんと努める哲學の合言葉とまでなる。一つの抽象的なる、且神話體系より離れんとする思考の最初の刺動、自由なる哲學の最初の端を告ぐるものである。カオスと同様、ヘシオドスに於て最初の概念としてあらはれるアエテルとは、かの純粹自然學的智慧の最も早き、はつきりした

萌芽である。その成素をソクラテスの哲言、「いな、呼吸にかけて、カオスにかけて空氣にかけて」にてアリストプアネスは要約した。彼アリストプアネスは深奥にして善良なる古風の心根を以つて、この空虚なる哲學を嘲笑するに倦むことがないであらう。然し、カオスは神話體系に先行するところの或る哲學の生みしものではない。それは神話を把握せんと努め、従つてそれを超えてゆく神話に續くところの哲學の生みしものである。神話にて終りまで到達し、これより端始に還りてあるものにして、そこより自らを把み概念化せんと求むる神話にして始めてカオスを端始に置き得る」。

ヘーゲルは「宗教哲學」に於て次の如く云つてゐる。

「何よりも先に、しかしカオスが成つた。とヘシオドスが歌つてゐる。それを以てすれば、カオス自身一つの「措定されしもの」である。しかし何が「措定するもの」であるかは語られてない。たゞ「成つた」と云はるゝのみである。何故なれば、根基は自己なるものでなく、自己なきもの必然性であり、それについては唯、それがあつたと云はれ得るのみである。カオスは直接的なるものゝ動揺する統一である。併し尙それ自身は主観ではない。特殊性である。それ故に、カオスについては「産む」とは云はれない。カオス自身、たゞ成つたやうに、それからも亦、再びこの必然性は成る。即ち廣き胸の大地、闇いタルタロス、エレボス、夜、及び何よりも美しく飾られしエロスに。我々は特殊性の全體が發生するを見る。大地は積極的なもの、普遍的なる根基。タルタロス・エレボス・夜は否定的なるもの、エロスは結合するもの、活動するものである。これらの諸特殊性は今やもう自ら産むものである」。

「斯くして出發は直接的自然性の範圍よりである。この自然性はこゝでは一者より創造されるものとして現はれることは出来ないこの自然諸力のこの特殊性が留る統一は精神的ではなくして、一つの自己本來的統一、カオスである」。

勿論ヘーゲルの規定宗教全體の端始を豫想して比較すべきであらうが、シエリングによるとかゝる解釋は希臘文獻に本來ないことを惜むといふ。「プラトン自身、總ての形相と性質とを缺く質料といふ意味に使ふべきところで、このカオスといふ言葉を使つてな

い。例へばテマイオス篇で、總ゆる感覺的なるものゝ母にして根基たるもの、土、空氣、火、水と名付られぬもの又これらより出でしものでもなければこれらが發生して來たものでもない、全く見ることも出來ないもの形態なきものを語つてゐる場合プラトン是用ひてない。若し希臘人が實際にカオスの概念で形相と形態とを缺く質料を意味してゐたならば、こゝに用ふべきであつたらう。カオスの概念は明かにより高き、より形而上學的な概念である。又明かにオヴヱッドに依つて傳へられたカオスの概念は正しくない。それによると、カオスは總ての元素の質料的混亂の状態、自然學的宇宙論に於て世界の秩序付けにこれの名の下に先行せしめる如きものを意味する。しかし希臘人がこの言葉をかゝる單なる自然學的機能に用ひた例は一つも見出せぬであらう。

人類が神々の全世界をその内奥よりあらはして後、自己自身に還りつつ、自己とその固有の運命とを意識させたる思想であるプロメテウス自身の神話の把握が、一般に對立し一般を超えゆく哲學する人間個を始めて、絶對に直面せしめ得る。自らカオスに死して、人間個をその本來に立返せしめる。形式なく限定なき自由に抛り出す。自然より歴史の世界に投げ入れる。「總ての現實的意識以前の、従つて總ての運動以前のかの状態の終局に達せる意識に、即ちかの原意識に指定されし勢位の統一——その分離乃至緊張に依つて始めて神話的過程が生ずるのである——が現はれる時、このことは正に、勢位の對立的緊張と分離とに依つて生じたる意識のこれに續いて經驗的に充實されることに對する關係に於て、唯絶對的滲透せる阻害なき統一の深所として、いはば神々の深淵として、意識にあらはれるであらう。神統記の端始に於けるこの統一の表象はカオスである。カオスなる言葉は純粹なる哲學的思辨的概念をあらはす。それには、その後の經驗的實現に對しての相對的空虛と無抵抗性とが底にある」。(シエリング神話の哲學)

ヘーゲルはプロメテウスを *Interessante Figur* と呼んだ。そして自然的なるものと精神的なるものとの中間者、

象徴的藝術形態より古典的藝術形態への最もきわ立つ移行點として取扱つた。しかし今、更に重要にして關心を惹く原意識と意識との中間にあつて原人間の原行爲するものとしてあらはれる。個の神話は當然實存の神話である。悟性によつて把握概念せられぬもの、一つの蹟であり、悟性をカオスに陥れる神話である。しかしカオスに凡ての有限性を粉碎せる自由者にして始めて辯證法的に把握し得る。しかし我々には尙、カオスを思辨的概念として究める課題が果されてない、これをつき進めることに依つてこの本來の問題に立返るであらうと豫想される。

シェリングに従へばカオスはその眞の概念よりすれば、單に質料的な形而下的統一ではなくして、精神的勢位の形而上的統一である。又、それは、多數の要素の無限定或は無限的の統一ではない。普通質料的カオスと考へらるゝ如きものでない。それは規定されると共に絶對的に閉じた、勢位の數の規定された統一である。これはヤヌスの形態になつて更に説明されよう。ヤヌスは語源的に間隙と門とを意味する古代イタリヤの兩面神、最高神ではないが最初におかるゝ神である。「單なるカオスとしてでなく、カオスながらその契機に分離をもつカオスとしての原統一、ヤヌス神は分離に於て把握せられしカオスである。」「互に背を向け合ふ二つの眼をもつものは、正に互に根元的に向き合ふところの、互に正(十)と負(一)として關係する勢位であらう。負一たるべきもの、存在なき純粹の可能のそれが、その否定性に止る時、それは純粹な正十を措定する、即ち前者と同様に何の可能もない純粹な存在を措定する。即ち前者は後者を措定し、引寄せいはゞ之に覆被さりつつ唯、一つの本質をあらはす。ここに於て兩勢位は内へ轉ぜられ、従つて外の面からは零〇となる。零即ちカオスである。ここにカオスが考へらるる時、統一はそれ自身の中に深められ、認識し得ず、いはゞ深淵的である。併し乍ら負一であるべきものが正十にまで高まり、負たるべきものがその本性に従つてポヂテブなるものを最早引き寄せず——何となればそれ自身はその本性上ポヂテブなるものなのでなく唯偶然的にさうなだから——それを突き返へす。兩者は互に分れ、背を向け合つた眼をもつものとして立つ。これは外の方へ開かれた統一でありローマのヤヌスに依つて示される」。

ヘシオドスの神統記に於ては、カオスに次いで、ガイア・タルタロス・エロス・エレボス・ニュクスがそれより必然に成る。産むと異り必然にそれより次いで成るものは離して考へることは出来ない。しかし離してもみなければならぬ。これはシエリングに於て徹底された。我々はその離れぬ面を取り上げねばならぬ。

「カオスよりエレボスと黒きニュクス夜成れり。絶対自體——尙未だそれに隠されてゐるものに對する總ての關係なく、全く閉ぢられた對立としてみられし絶対自體はカオスである。同じ絶対がしかしこの對立に關係して考へ得られるし、尙つまり單に否定として、對立の非存在として考へ得られる。この一段と否定的なる概念に相應するものはエレボスである。エレボスは尙對立を包み隠す絶対であり、絶対は意識に於ては女性的なるものとして、同様否定的なるもの、對立を結合せずに、それを顯はしめぬものとして相應し得る。これがニュクスである」。

ここに、對立従つて區分、分離と結合、包むもの等の萌芽を見る。ここより語源よりするカオスのあり方を示すものに進む。即ち *záos, zaiwos, zácos*, 等と語源を共にし、開かれたるあり方、間隙、欠伸すること、大口あけること深淵に引きこむこと、これより無抵抗の概念が出る。これはカオスより必然に成るタルタロスとしてのカオスの在り方と云へよう。この概念の否定的なる面、具體性の不在、無抵抗性、排除より次第にエロスの面へ移り行くをみる。

缺乏、貧窮、渴望、憧憬。而して一面、空虚なる空間、大氣、非有、場所の概念よりガイアの面に移り行く。即ち單なる潜勢的なるものより現勢的へ。受容媒質、可能態、總ての形相と形態とを缺いた質料、エロスと結んで基體、母胎、何ものかを生み出さんとする動き、生成變化、活動運動、時間性があらはれ必然、突如態、瞬間、今。混沌、混亂、混合、動的媒質、事物の怒り、錯動原因。かかる概念解釋の蒐集は、プロメテウスの場合にしたやうな手續きで

凡ゆる面より凡ゆる吟味を遂行し行かねばならない。存在論はカオスより絶対の認識に移る。カオスの概念の考察はカオスの在り方の問題とされ、それが即今此處此のといふに至つてその本來の根元、實存を問題とせねばならなくなる。

悟性の概念し得ぬものの象徴なすものが神話とさるるとき、實在の把握はただ神話によつてなされる。神話は悟性の粉碎され自由となりし理性の理念、靈魂宇宙神の想像的表現と道德的徳、個人と分たれし國家、或は歴史的なるもの發端、終末、來世、創造、原因となり支へとなるものの想定、即ちそれらの範疇の想像的演繹によつて、超越の感情を惹き起し又統制するもの、絶対に立たせ、而もその價值判斷の立場よりの原理に還らしめんとするもの、ただ感情に訴へる所謂神話の觀照に止まらせずに嚴肅に實踐せしめるもの、かかるミユトスは我々を善に向はせる故に眞であり、かくする力のあるは美にして而も聖的である。故にこれを信じ、又信じ込むやう呪歌せられねばならぬとするソクラテ斯的能動、の立場に行爲せねばならぬものである。

しからば實存の神話とは何を指すか。これを最も豊富に取扱つたものは再びシェリングであらう。原意識と意識との關係、原始一神論より多神論、本來的神話への移行。神統記的神話世界と歴史との發端を原人間の原行爲と把へること、それが神話的にみらるととき先づ、ペルセフォネが誘惑に墜ちたことである。この神に背ける人間の第一歩の踏み出しはただ原事實である。吾々はそれについてはただそれが起つたと云ひ得るのである。而も原人間にあつては石榴の實を食べるか食べないか、どちらも出來た選擇に於ける原行爲であり、在ることも無いことも出來る原事實であり、原始偶然である。エバの誘惑もそれである。更に、本質に止り、教としてあらはれたものが、現實に眞なる宗

教として認識に於て把握されようとするところに本來的神話の原因と性格とがあり、ここに知るものとしての普遍的人間、アダムの原罪と、歴史の端始としてのルチフェルにてこれが象徴される。この個的なものと人類的なるもの分ち難き聯關ある象徴の外に、我々はより注意すべきものとしてこの種的な象徴を見逃してはならぬ。即ちカントが歴史の端始を理性と自由と共に墮罪に置いた慧眼と正しさを認めてシエリングが、その原始一神論と多神論との根拠を求めて觸れた、民族發生と民族分裂、言葉の混亂よりのバベルと、人類より人間の意識に於けるものとして宗教の成立さるる前提としての大洪水を見失つてはならない。「國々その酒を飲めり是をもて國々狂へり……我らバビロンを醫さんとすれど愈ず我らこれを捨て各その國に歸るべし。そはその罰天に及び雲に至ればなり」。かのプロメテウス原型に於て、種の位置に人類までより見得なかつたのはその性格でありカオスの因であつた。

かく、カオスと概念し、このカオスを問題化すると、それは既に我々が問題としてゐたといふことが判明する。このカオスの問題をプロメテウスにて解決突破しようと從事し來つたのである。シエリングのプロメテウス導入の個所、即ちアリストテレスはヌースに神的なるものを認めたが、對神的なるものを認めなかつたとし悲劇を導入せる個所、「即ち對神的原理と共に我々は自らに前提せる目標に關して決定的な點に達した。課題は存在するものから自由である原理を、對目的にその分離性に於て持つといふことであり、原理に達しようとする學問の持たうとするものである」。かかるカオスの把握でもあり、又、實存の神話的把握でもあつたのである。即ちプロメテウスに離れ難く結びついてゐる神話群は、かの原行爲の象徴に外ならぬ。最初の女性バンドラの箱、プロメテウスのアダムの分身エピメテウス、ゼウス祭祀の創始者にして、ヘムネの祖たるデウカリオンの大洪水。「其塔の頂を天にいたらしめん斯し

て我等名を揚げて全地の表面に散ることを免れん」。山に山を重ねて天に達しようとするティタン。「汝等かならず死る事あらじ、神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け、汝等神の如くなりて善悪を知るに至るを知りたまふなり」、プロメテウスのサタン面。且つ創造、自然、人間、第二の創造、救済、犠牲に於てのクリスト面。

實存の神話は、個が個として絶對に關係し、一般を超えるものの神話である故にそれは罪の神話であり、一般を超えし個を後悔せしめ、一般に自己を犠牲とするやう還歸せしめるものである。しかしこれは一般倫理となる。實存のいみはない。神話は絶對倫理として、一般を超えしものが、絶對と關係することに依つて一般を規定し得るとの信を示す。これは個として絶對に現前せるもの、カオスに於てその有限を破滅せられしものの孤獨の道であり、一般倫理に従ふものの如く義務とするものは先づ粉碎されねばならない。それは一般を無とし神々をカオスに死なせる以前に、自己が無となり従つて一般へ犠牲となるか、死に絶えて沈黙のまま一般を依持するかいづれかである。例外のみがカオスに位す例外のみがカオスより情熱をもつて一般を規定しようとする。プロメテウスは例外の一般的象徴たり得るか。既にそれは人倫性の一般的象徴である。一般として個を規定してはヘシオドスにあらはれ、より高き一般へ勇氣と忍苦もて犠牲となり一般へ個を表現せるものとしてはアイスキュロスの悲劇にあらはれた。例外の一般的象徴、個が個として絶對に關係し一般を規定せんとするもの一般的象徴はあり得るか。實例、例外的事實の提出よりないのであらうか。しからばそれは如何なる一般の例外であるか。内容としては人倫の、形式としては一般的原型の例外であるに外ならぬ。例外の一般的象徴はひとしく人倫性の一般的象徴、プロメテウスに外ならない。

個が絶對との關係に於て一般を規定するのが例外であるが、それが必然の形式にもたらされ、その規定さる一般が

必然として先見さるとき、それはより高き一般を後盾とするものとして例外ではない。プロメテウスはカオスに死ぬ。例外はカオスに於て生くるものである。一般を越え、而もより高き一般の必然を先見し得ぬ無知に現前するカオスに於て無限として自由として絶對に直面する。人間個は一般的原型に對して例外である。例外の典型は天才であらう。しかし例外の本質は死すべきものである。不死者の神話には把へ得ぬもの、而もそれは常にこの把へ得ぬものや象徴せんとしてゐるに外ならぬ。把へ得ず、ただ象徴に俟つものは無限なるものであり、自由なるものであり、人間個の行爲に外ならない。行爲は唯一度に於てする。絶對に例外的であり、唯一回よりあり得ぬ故に一つの行爲よりしかあり得ない。行爲の原型、プロメテウスの常に永遠に起りつつあるものである。人間個は行爲に於て天才と同じく例外としてカオスに位してゐる。否、例外もその人間個としての行爲に於てのみカオスに生き得るのである。個の有限性が死せざればカオスにあつて無限として生き得ない。そこにあつては粉碎され、一般につきかへされ個が無となるであらう。このいづれか、自己の生死を先見出来ぬ無知こそがしかしカオスに生きてをることなのである。その自覺に、即ち生死を賭すことに無限があり自由があり、人間個の行爲がある。生死を賭さざるもの、何か一般に頼るものはここに粉碎されて了はる、既に自由は死してゐるのである。自由自體の必然の形式はプロメテウスである。プロメテウスはカオスに死ぬ。生くるものは自由自體である。自由を死なすもの、ゼウスにても死なせ得ぬ意志をすら滅するもの、それは自由の死そのものに外ならぬ、死すべき個そのものである。生死を賭すもののみが個として絶對に現前し得る。生死を賭すとは自覺せる行爲に外ならぬ、あらゆる人間の死に覺醒するものは既にそれを行爲に於て賭することになる。即今此處を最も一般的なるものとするは思辨の道である、即今此處を最も確實とするは直接的なる

ものである、即今此處に生死を賭するのは絶對的である。藝術、宗教、哲學に絶對性あるのはそれは例外、天才の行爲であり、カオスより一般を規定せる故であり、そこに遊ぶ故絶對に達するのでは決してない。生死を賭するものに絶對性があるのである。生死を問題とする、大事を究明する、それは生死を賭さねばならぬ。生死を賭すのは行爲である。非行爲、出行爲の宗教に絶對必要であるものは出家である。常にかみをそる出家行爲せねばならぬ。一瞬一瞬、絶對を賭さねばならない。信仰も常にここに賭さねばならぬ。ヨブの女達の如きその神に否定せられる。既成の絶對は一般の偶像に過ぎない。論理の絶對矛盾にまで押しつめ、そこを行爲に於て把んだ絶對同一も形式的な適用をその後なし行くとき既に死んだものであることは論を俟たない。藝術の自由なきものは、有限の死への不安をまぎらさうとする慰みごと、有限の生に追はるる喘ぎに外ならぬ。ただ行爲に於ける生死を賭し來つたもののみ絶對性がある。巧と美とが、崇高の根元のカオスより價値をもつて把握されたとき、自由として絶對性を要求する。藝術が絶對性をもつは行爲に於てである。その本質は技術行爲である。技術とは大別して廣い意味の工藝と舞踏とを指す。前者は制作、生産的なるもの、後者は社交と適確なる所作運轉、交易的なるもの、これに對して出家はこの捨棄、消費的なるもの。消費は總ての人に必須である。出家的なるものの凡ての人に對する絶えざる呼びかけがあり人皆良心持つ所以である。この否定面に對して政治はこの肯定面を主張する。この意味に於ける政治は、必然と權力とであり、全智全能たらんとする鬭争である。必然とは生産的なるものを最も生産的ならしむる全體の要求であり、權力とは、總ての運轉の統制強制能力である。ここに自由を奪はんとするものがある。しかし兩者共に個の意志を滅却出來ぬ。唯自由の死そのもののみがそれをなす。自由に於て、行爲によつて必然は正義と稱され、權力は國家となる。必然は

全體的にして必然の先見もたぬ個に完全に把へられぬ、視點の相異を争ふ。ここに良心の働くところあり絶對者への歸依の因をなすものがあらはれる。權力は放棄されしその空虚を襲つて正義を主張する。正義に力あらしめねばならず、權力に正義あらしめねばならぬ。これは當爲であり、自由に於て成立つ。一般の個の規定たるものではなく、自由に於て一般を規定する個の絶對行爲であり、絶對的義務である。それは個の信仰を示すといふよりは國家の建設行爲である。

技術に於て、生産的ならざるものは價値なく死せるものである。この意味にての死に面す。生産的なるものはデモニーニッシュに人間に迫るが遂に生を奪ふことは出来ない。この意味にての生は賭されぬ。ここにては生死は自覺されない。政治に於ては必然と權力とは、或は生を賭し或は死を賭し、殺すものとして迫るが自由を殺せぬ、生死を賭することを否定出来ない。行爲を却つて成り立しめる。出家は生死を解脱せんとして生死を賭するを放棄しようとする。これは行爲にして生死を賭さざればならない。非行爲、生死を賭する行爲を出で超えるものは個の行爲ではない。絶對的行爲にして絶對の自由であり、從て個の再びカオスに位すに外ならぬ。否定消極面に於ける絶えざる緊張、生死を問題とする。しかし覺醒するものは直に現實的に生死を賭さねばならない。出家に於て行爲はその否定消極面を得る。藝術は技術行爲である。宗教は出家行爲である。政治行爲は國家である。その行爲なる點によつて絶對性を得る。而して行爲を成り立しめる政治の行爲に於て始めて行爲はその肯定積極面、全き現實性を得る。國家に於て現實的に生死を賭す、有限、無限の生死、自己のみならず他の生死をも、あらゆる生死を賭す。哲學はこれの自覺である。それは知たる性格をもつ故に苦惱し、あらゆる可能を試みて無知に終り、自由を得て一般を個として絶對に

關係して規定する。それは必然の先見にあらずして行爲の先見であり、行爲の先見は自由であり、無知に外ならぬ。知の苦惱は行爲の反省たる故に成立し、苦惱に於て不幸と悔めさを知るもの、苦惱に於て個の偉大と自愛を知るもの、ただ行爲に於てのみ自覺する。行爲するものは苦惱せねばならぬ、有限に於て反省する故に。ただ行爲に於て自由である、無限に於て反復する故に。行爲の反復は自由である。

行爲は生死を賭す。唯一回、唯一度に於てする。無限なると共に一つよりあり得ない。これ行爲の神話ありといふ所以である。現在行爲するのは、その反復に外ならぬ。永遠に於て行爲するのである。唯一の行爲が永遠に行はれつつあり繰り返りかへされつつある。行爲の反復は自由である。行爲の神話は自由のそれである。永遠は眞の反復であり、行爲の反復であり、自由であり、生死を賭す瞬間に外ならぬ。

この反復を呼ぶものは反復そのものであり、「今初めて元初的イデアに満足を興へたかの如く自らを自己の守護神と和解せるものとして見出す」ことをせき立ててやまぬ神話である。行爲の神話であり反復の神話であり自由の神話であるもの、プロメテウスを神話に把へんとする所以である。

「古代に於ける諸々の密儀も精神的宗教の凡てに共通なる、人間的に苦惱する神といふ考なくしては、歴史全體は畢竟不可解である。聖書にも顯示の諸期を區別し、そして遙かなる未來として、神が一切中一切である時、即ち神が全く實現される時を定立してゐる」(西谷氏譯) これに對しキエルケゴールはシェリングの根本思想は不安等は神の創造の苦惱をあらはすといふことで、生産したときのみ自己を幸福と認め且つ他に傳へることの出來ぬ幸福は不幸であると考へたゲーテ等と神とを比較したものとし、形而上學と教義學とが混亂せしめられるとかくも奇妙となると評する。キエルケゴール自身にあつてはアダムであり罪であり反復は超越的顛囑である。ヨブにあつて反復を待つのみ信仰するのみである。自由は反復を實現し得るかどうかを示すもの。

反復の神話は行爲の自由の神話、個の神話たると共に自由の行爲の神話、創造の神話に外ならぬ。プロメテウス神話は反復の神話である。即ち個プロメテウスが人間を創造したといふ「單純なる神話」である。苦惱が人間を創造し行爲が人間を墾り、自由が人間を人間たらしめるといふこと、「人間の本质は、本質的には彼自身の行爲である」といふこと。プロメテウスが人間を創造し、人間を己れに似せて神々に現前せしめたといふことは自覺であり行爲である。人間が行爲するとは、即ち人間がプロメテウスにまねぶとは、藝術家、詩人としてゼウスの下の第二の創造者たるより更に根元的に、行爲に於て自己を創造することに外ならぬ。まねびは一般が個を規定するのではない。それは空轉である。個が例外的に一般を規定する。それはカオスに位し、自由であり生死を賅してゐることである。それは行爲の反復であり、プロメテウスがカオスに死し人間が自由として行爲する。内面的必然性として把まれたプロメテウス全神話は自由に於て成立する。それ自體自由なのである。前進即遡源、遡源即前進であり、行爲の媒介とは即ち行爲の反復、自由に外ならぬ。「ある意味で」運命愛と云はれ得る、しかし直にそれは自由愛に外ならない。

行爲の神話は自由であるが又それ故に善でなければならぬ。カオスに於てのみ價值把握が成立し絶對に直面する。カオスに光が誕生する。創造と共にクリジスが惹き起される。「私はこの新しきものと舊きものとのごつた混ぜに憤慨した」。カオスそのものは價值以前である、原理が絶對を要求して立てられるとき、その把握より脱するもの、カオスの光の誕生以前の古きへかへらんとするもの、それが悪である。光がニュクスとエレボスの闇に對するときクリジスが起る。カオスに位する人間個、死すべきものの自由がこの善と悪との分裂に必要である。

カオスは、個が個として生死を賅し、一般を超え——あれでもない、これでもない——、一般を絶對との關係より

規定するとき、價值判斷の原理とされ、絶對でありそこより直に二元性が出る。即ち、カオスたるタルタロスがその元初の深淵より絶對に於ける二元性となる。カオスたるエロスがその元初の憧憬より愛としての絶對とならねばならない。カオスたるガイアはその潜勢的なるものがすべて現勢的なるものとなり、光普くその争闘する生成的な元初の基體は永遠の闇にとちこめられて絶對の現實的なるものとして、絶對の顯示としての國家となる。

ここに民族が民族によつて世界に現はれたといふ神話、従つて行爲の反復を容れ且つ相俟つところの必然の神話がなければならぬ。内的必然性もつ自由自體の神話、プロメテウス神話全體を想起し、反復する善のイデアと世界の神話とがなければならぬ。それは全歴史を空騒ぎに歸せしめぬもの、種族の歴史を偶然的にせざるもの、反復即創造の目的、終局の神話である。目的王國たる國家であり、國家建設としてプロメテウスの行爲である。實存者と人格實存との同一はここにあらねばならない。絶對が分れカオス現前せしめるは、自己が現實となるために外ならず、人間個があらんために外ならぬ。プロメテウスの自體なるもの、自由であり行爲であり國家實現に外ならぬ。絶對の現實に於てガイアは國家と一つになる。ここに終局の神話がある。それは目的であり善である。而も終局の神話は想起的なる場合、靈魂不滅の神話である、しかしそれが行爲の不滅に深められ、國家無窮の神話となるとき反復的である。社會のフェニックス觀、或は破局神話ミトはここまで建設的に高められねばならない。

行爲の英雄ヘラクレスの忠告者にして、解放を俟つもの、その行爲中不測の苦惱を蒙りしものの身代りを引受けるものプロメテウスは哲學の運命と使命であり、その神話である。哲學は行爲の先見であり、行爲の反省である。しかし何より行爲である。それは國家實現の行爲でなければならぬ。先見に想起なければ單なる囁語、空想であらう。反

省に反復なければ、單なる繰言、妄想であらう。行爲の先見は無知であり實驗に生死を賭す。行爲の反省は有限無限自分のみならず他人のすべての生死の責任をとる。それは單なる不安でもなければ悔恨でもない。行爲する。憤懣でもなければ、鈍き祈禱に終るものでもない。行爲の反復である。罪より罪、現存在より現存在への飛躍、反復の範疇をその超越的なる故により根元的に行爲の反復とする所以である。一切中の一切を愛よりも行爲する所以である。

かくして私の今あるはカオスに於てでもけなれば、絶對でもない、カオスであり同時に絶對たる現實に行爲しあるのである。現實にそれを自覺しをるのである。もはや悲劇、喜劇の詩人的顧慮はない。本來の面目、ここにプロメテウス神話より自由になる。とりもなほさずその反復、行爲する。それを信じて意識の二乗を、プロメテウスに縛られ、そのあと追ひしこれまでを越える。行爲する哲學に於て自由に飛躍する。それは行爲の自慰でない、行爲である。自由を歌ふ詩人でもない、自由である。現實の行爲である。現實に當つてほつとする有限の立場ならざる信仰の厳しき可能性の訓練といふより、現實の行爲であり自由である。現實の後を追ふエピメテウスといふよりは哲學は本來的に無知者ソクラテスイふ如く行爲するプロメテウス、行爲の先見でなければならぬ。可能として現實に臨むより絶對的當爲として現實を行爲することである。自由なる哲學に於て現實の苦惱を眞向より個に受けとり、正覺を以て行爲することではなければならぬ。